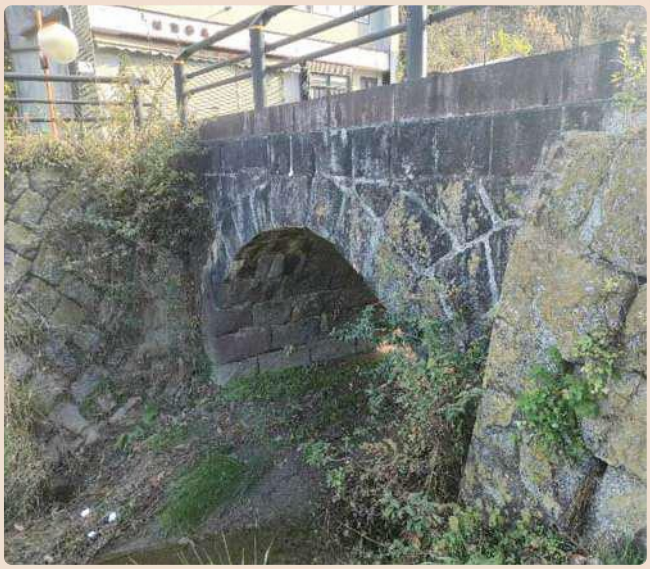
7 明道橋（みょうどうばし）

- 所在地／二本松市東新殿（二本松市道）
- 架橋年／不明（明治初期？）
- 管理者／二本松市
- 橋長・幅員／ L=5.1m,W=6.2m（うち石橋3.2m）
  アーチ幅3.6m、アーチ高2.2m
- 沿革
  国道349号の旧道にある。聞き取りによれば明治初期には存在したが、町史などに橋の歴史に関する記載はない。
  アーチは御影石の単アーチ、壁石は間知石積風。昭和の時代、上流側にコンクリート床版橋で拡幅されており、その際に石橋も補修されたと考えられ、目地にはモルタルが施工。
  次郎右衛門橋とも呼ばれているが、橋を施工した石工の名だという。



8 東根堰水路橋（ひがしねせきすいろきょう）

- 所在地／伊達市保原町（東根堰用水路）
- 架橋年／大正３年（1914）頃
- 管理者／東根堰土地改良区
- 橋長・幅員／ L=8.6m、W=2.7m（地覆内幅2mアーチ幅2.7m、アーチ高2.5m
- 沿革
  信夫発電所から伊達市梁川町、保原町の農業用水を導水する東根堰用水路の水路橋。東根堰の用水を東西に分水する大柳円筒分水の北側にある。
  1912年（明治45年）阿武隈川右岸箱崎地区からポンプにより揚水する愛宕疎水整備により着工、1914年に完成。
  石は進歩した加工技術により面取りされ、目地はモルタルで補強。壁石も布積みで高い精度で積まれ、石表面の風化はあるが孕み出し等もなく良好な状態で保全されている。

9 不動川水管橋（ふどうがわすいかんきょう）

- 所在地／会津若松市一箕町（戸ノ口堰用水路）
- 架橋年／不明（明治～大正期？）
- 管理者／戸ノ口堰土地改良区
- 橋長・幅員／ L=7.0m、W=3.2m
  アーチ径間4.0m、アーチ高2.0m
- 沿革
  猪苗代湖から会津若松市内に導水する戸ノ口用水の、飯盛山洞門の入口に架橋されている。
  1835年（天保６年）から会津藩主松平容敬公が行った戸ノ口堰の大改修の際に不動沢に架橋したとの記録があるが、この橋かは不明。
  壁石は布積みで、石材は安山岩（凝灰岩系）で柔らかく、表面の風化が進んでいる。
  昭和50年代の土地改良事業により補修され目地にはアーチ部も含めモルタルが詰められており、解体後後再構築されたとみられる。漏水も見られず現在も良好な状態。

「福島の石橋群」ができるまで

「福島県の石橋群」は、信州の高遠石工や九州の豊後石工、鹿児島石工などの県外の石工が地元の石工を指導して建設されたのが始まりです。この工事を通じ地元石工が石橋建設に必要な技術を得たことで、その後県内の石工が単独で石橋を造り上げていきますが、この間の歴史を振り返ってみます。

1　高遠石工の関わり

写真１

信州（長野県）の高遠藩は、石の産地であったことから、古くから石工職人が多く、中世頃からは本州各地で旅稼ぎを行っていました。福島県にも上杉景勝や保科正之が会津若松城主になったころから信州石工が往来するようになり、猪苗代町麓山神社の左右大臣像は、保科正之が高遠藩から連れてきた石工の作と伝えられています。寛永年間の二本松城石垣修理も高遠石工が担当したと言われています。

江戸時代には中通り地方にも高遠石工が往来するようになり、神社の鳥居や狛犬、仏像など多数の作品を残しています。福島市飯野町の住吉神社の鳥居（写真１）などを手掛けた花井染右衛門は、「福島の石橋群」の一つの大桂寺の石橋を建設しており、高遠石工の技術導入の貴重な実例となっています。また、江戸末期に脱藩し県南地方に移り住み、多くの寺社に狛犬の彫刻作品（写真２）を残した小松利平は有名で、その技術は養子の小松寅吉などの地元の石工に受け継がれました。

写真２

2　安積疎水開発における豊後石工の関わり

明治12年～16年にかけて行われた安積疎水開発では、水門や水路橋などの石造りの施設が多数建造されました。この時工事主任を務めた豊後（大分県）出身の南一郎平は、故郷の水路工事に石工として携わった豊後石工を呼び、猪苗代湖の十六橋水門、五百川の熱海眼鏡橋などを地元石工を指導しながら建設しました。

写真３

十六橋水門（写真３）は明治13年に完成し、16径間、橋長65mの大規模な石アーチ橋でしたが、その後大正２年に電動で開閉される新たな水門建設に伴い撤去されました。

3　三島通庸県令による鹿児島石工の関わり

「土木県令」と呼ばれた三島通庸は、明治15年に山形県知事から福島県知事に就任、会津三方道路をはじめとする県内の道路整備に努めました。

写真４

明治16年の洪水により、福島城下の入り口にあった木橋が流されると、三島は直ちに橋の建設を指示し、明治18年には当時としては破格の規模の13径間、橋長192.7mの石アーチ橋である「信夫橋」（写真４）が完成しました。この工事は山形県令時代から三島に仕えていた鹿児島の石工奥野忠蔵や技官の原口祐之らが監督し、川俣の布野源六や、三春の松本亀吉などの県内の石工により建設されましたが、残念ながらその後明治24年の洪水により破損し撤去され、その後木橋が架けられたのち、今のコンクリート製の信夫橋となりました。

県内の石工たちは同時期に建設された松川橋でも九州の先進的な石橋技術を学び、４年後には布野が地元の川俣町に壁沢川橋を架けるなど、その後は地元石工が独力で多数の石橋を県内に建設していきました。

これらの石橋は、多くが道路の改修などにより失われましたが、県北地方を中心に現在も多数が現存し、江戸時代から明治時代にかけて、全国各地からの様々な技術導入により発達した本県の土木技術の歴史を現代に伝える貴重な文化遺産のひとつとなっています。